

ある静かな逝く春のゆふべ、私達は銀座に近いある Café の軽い椅子に腰をおろしてゐた。

私達にとつて自然ほど親しいものはなかつた。私達のたましひは自然の胸の中にただちに溶け入つて、世のあらゆるなやみを洗ひ流すやうに感ずることもできた。私達にとつて自然は隠れ家であり、すべての慰めを與へる母であり、また神に近く道でもあつた。

私達はすべての近郊の野と園とにさまよひ暮した。私達のさまよひの生活の間に都の春は次第に濃やかになつて行つた。豊麗な春の姿に私達は馴れてしまつた。私達の心には恰も澄み切つた青い空に、軽く白い雲がかかるやうに、かすかにある物

足りなさがきざしそめた。私達の心には、やがてこのさまよひの終りが近づいて来たことが、ほぼ感ぜられた。

Colorの灯は、紫色の光を、かすかにその白い壁になげてゐた、春の宵の楽しさは私達の心を満たし、窓にかけられた白いレースは微風にゆれてゐた、私達は快活に話し合つてゐた。

「ね、旅に出よう、深く／＼自然の胸の底まで進んでみよう、ね、旅に出よう！」突然に友の一人は大きな聲で叫んだ、彼の眼は青年らしい勇しい輝やきを見せてゐた。

隣りのテーブルに倚つてゐた若い女は、驚いたやうなまなざしをして私達の方をふりむいた。私は彼女の顔を真正面から見た、彼女は嘗て、ある郊外の美しい劇場でストリンドベルヒの *Fräulein Julie* の役をつとめた女優であつた。そしてその役

は、作品のふくむ鋭い力のために、多くの人にかなり強い感動を與へたものであつた。今は彼女はただその豊かな腕を大理石の白いテーブルの上に、だるさうにおいてゐるのみであつた。

「山に行かう。岩の間に、雲のあるところに。山に登らう、山に登らう！」私達は聲をそろへて友の叫びに答へた。

窓からは静かな夜氣が流れ込んでゐた。遠くで電車のきしる響が聞えてきた。隅のテーブルからはにぎやかな笑ひ聲が起つた。私達は四方から首をさしのばして旅の計画を話し合つた。私達は山から歸つて、また都の渦の中に巻きこまれる楽しさまでを夢みてゐた。

二

私はその夜遅く獨りで日比谷公園に歩み入つた、夕方友に別れてからの短い間にも、複雑な世の姿が私のまはりに渦のやうにくるめいて過ぎ去り行き、私はその中に、四方からの作用を受けながら、遂に今かうして静かになつた小徑をあるいてゐることを考へると、不思議なやうにも思はれた。軽い雨が音なく滌いでゐたけれども、私は傘をささずに小徑をさまよつた。そして私はこのさまよひの生活も、やうやくその終りに到達したと思つた。小雨は私の心を物静かにし、私の心はこの静けさに涙するばかりの感謝を覺えた。かゝる生活の *Finale* には全くふさはしい静けさであつた、雨は音もなく滌いで、美しい雲が都會の灯に照されて、薄赤くかゝつてゐるのが樹の間からながめられた、私はたゞさまよひあるいた。白い瓦斯の光にゆるめいて、風のゆすぶれる木の葉をちら／＼と光らせた、私は光の中からもまた *allée* の暗にあゆみ入つた。花壇の花はもう大抵しほれてゐるやうに見えた。その

色はしかとは見えわかぬにもかかはらず、何となく哀れ深く私はながめやつた。ああ、そこにもう色のさめたヒヤシンスの花がしほれ果てて、うなだれてゐる。瓦斯の光は涙のやうに、あはれな花瓣に接吻してゐた。私の心はこの物静かな園の韻律に共鳴を覺えた。「曇りたる空としほれたるヒヤシンス。」私はさういふ題の詩の句が頭の中に漂ふままにしておいた。

小さい雨は池に滌いでゐた。水は一面に湛へられて、豊かな淋しさが瓦斯の灯にゆるめいてゐた。水は白く亡靈のやうな姿となつて空にあがり、何事をおかつぶやいてゐた。あづまやの腰掛によつた私の煙草の煙は、全く風のないためにじつと動かなかつた。私は静かに噴水の音に耳を傾けてゐた。噴水は何をつぶやくのであらう？ 私はこれで充分に落着いてゐるのであらうか？ 私は首をたれて私の姿をかへりみだ。私のさまよひの生活にも今や *Finale* は來た、私はこの静かな *Finale* の後に、如

何なる新しき生活が来るかと考へた。それは味の失せたやうな生活であらうか？
また清さも夢も永久に失はれてしまふものであらうか？ 私はもう何事をも見なかつた、私の生活に小さいFinaleが來たとのみ私は思つてゐた。

私が床の中から空をみつめた時にはもう雨は晴れてゐた。そして雲の絶間に星がひかるのがなめられた。私は今は一つの星をも見たくはなかつた。むしろ暗い雲が私の臉を覆ふのが、私の心を静かにするやうに思はれた。私は雨が私の心を更に更におさへ静めて行くことを望んでゐた。

三

次の朝はまた曇つた空から細かい雨が静かに降りそゞいでゐた。停車場には私の友のMがマントを着て、彼の顔色にはうつりのよい色の、形のよいソフトをかぶつ

て私を待つてゐた。私達は微笑みながら握手をし、楽しい挨拶を取りかはした。

細かい雨の中を私達の汽車は走つて行つた。やがて私達はもう都會を離れてしまつた。淺草の不思議な塔が見えてゐたのももうさつきの事であつた。私達の汽車は二三週間前には櫻草が美しく咲き亂れてゐた野のほとりを走り過ぎた。その時は都會のはなやかなバラソルや、はでな模様の裾や、女學生の袴などが、その野に群がり散らばつてゐた。私達は山に行く旅を急いでゐる。次第に私達は昨日までの都の生活に夢のやうに思ふやうになつてきた。すべてがもう遠くなつてゐた。すべての都の美しい色も形も、強い響もみな次第に淡くなつて行つた。私達は今はある距離を保つて都をながめる事ができた。

『日比谷公園の散歩でも、植物園の美しい草の上でも、考へてみると面白いね。』
『面白い。人間といふものは物を観るのに、ある時間とか空間とかの距離を必要と

するものだね。」と私は答へた。

私達の汽車が三時間ばかり雨の平原を走り過ぎた頃、空には雲切れがして来た。そして次第におぼろな山脈の姿があらはれ始めた。友は私に指さして、今日これから登らうとする山の姿を教へてくれた。それは別段に不思議な姿をしてはゐなかつたけれど、裾野のゆるやかな線は平和な心地を味はせた。次第に地平線の方は晴れてきた。そして榛名の姿なども見られた。空の雲の間に、やゝ趣を異にした雲の層が見えた。

「あれは多分淺間の煙だらう。」と友は私に指し示した。

私達は遂に野に歩み出た。麥の緑のあざやかな色は私の心を樂しませ、自由な野の幸福な姿は私達をその懷に抱かうとしてゐた。道の片側には小川が流れ、そして

處々には大きな莖の優しい花が咲いてゐた。私達はその花などを摘みながら、ゆるやかな傾斜を登つて行つた。もう雨は晴れてゐた。そして空にはまだ水蒸氣が晴れやらす漂つてゐたけれど、野のすべての上には薄日が漏れて、それが濃い麥の輝いた緑と、黄色に映える菜種の花と、蠶のために作つてある桑畠と、野趣のある農家の屋根とにそそいでゐた。やがて私達は平原を離れた。そして眞直に立つた高い松の傍を通つて行つた。松林の間には名の解らぬ美しい花が色々咲いてゐた。松林の一端に坐つて見渡すと、平原の町が低く見られた。

「雲がないと地平線が案外高い處にあるので驚くよ。」と友は私に言つた。

私達は松林を通り過ぎた。そして一步一步に緑は消えて行つた。私達のまはりには解の木や檜の木のみが見られた。その外の雑木はまだ芽を出したばかりで、木の葉の茂みは見られなかつた。草もまだ緑にはなつてゐなかつた。ここにはまだ春が

来てゐない、といふことが次第に解つて来た。私達は次第に春からはなれつゝあつた。

私達は暫らくあるいた後に草の上に横はつて休んだ。緑の草ではなかつたけれども、やがて盛んな色に萌え出づる強い力は、枯れたやうな色の間にも隠し難く秘んでゐた。その草のしとねは心地よいものであつた。やゝ強い風が吹き出して私達の煙草の煙を吹き拂つた。

『もう僕達は高原に来てしまつたね。』と友は言つた。

『東京の町でこんなに風が吹かうものなら、さぞ塵が飛ぶことだらうね。』私はかう云ひながら、昨日の今頃の都の街の中のある怖るべき塵埃の雲を眼の前に舞ひ立たせてみた。その塵埃は怖るべき激しき病菌を四方に散らばしてゐる。私達は言はゞそれを遁れてこゝに來た。私は今更ながら自由な歡ばしさを感じた。私達はどのや

うな所でも調和した落着いた氣分を保つ事ができる。都の真中でも、かゝる高原でも全く何の不調和をも感じない。私は汽車の中で私達が aristocrats の餘裕のある華やかな氣分も democrats の勇ましい努力的な氣分も共に讚美し得た事を思ひ出した。

『なか／＼爽やかな冷たい風だね。かうして休んでゐると寒くなつてくる。』

『越後の山の雪を吹いて來た風だもの。』

『さう聞くと何となく嬉しくなつて來る。』

私達はまたあるき出した。私達の前に展げる自然は、次第に緑を減少すると共に、黄色なむきだしの粗々しい姿となつてきた。そして彼方に柔らかな落葉松の緑が見える時には、私達の心は偶然な見つけものをした時のやうな軽い歡びを感じた。先程まで輪廓のはつきりしてゐた彼方の山は、また煙のやうな霧に包まれて、ぼんや

りした姿となつた。私達は次第に草をさへ離れて來た。通は小川に沿つたり離れたりして、石ころばかりの山道となつた。曠原に私達は踏み入つた。もしくは私達は春より冬に歸る道をたどつてゐる。私は何かのころみのためにこの山道をたどらねばならぬのかも知れない。先程桃の林を前にした何となくロマンチッシュな小屋も、その中にゐた老母と主婦との醜いながらに親切らしい顔も、あかるく日の射し込んだ灌木の林も、既にうしろになつてしまつた。私はもつと進んで深く山の奥まで行かねばならぬ。そこには永遠の平安な湖が深く靜かに湛へて私達を待つてゐる筈である。

もう次第に夕暮も近づく頃となつた。私達は最後の村を去つて石の多い道を暫く進んだ。落葉松の林にかはつて、私達の前には新しく白樺の林が展けて來た。所々には驚くばかり美しい肌をして、幹の細い白樺が處女のやうな柔らかさをもつて立

つてゐた。その枝にはほんの小さい芽が見られた。

私達はなほ私達の友がおとから來ることについて考へてゐた。

『この粗野な自然は恐らくJを失望させるだらうと思ふよ。』

『さうだらうね、白樺の芽の出てゐるのを描きたいと云つてゐたとすれば失望するかも知れない。』私はこんな事を言ひながら、疲れた足をひきずつて、元氣よく進んで行く友に従つて行つた。

遂に私達は最後の高原までたどり着いた。さきに急な坂道を登つて行つた友が、私達のためにこしらへておいて呉れたミルクのはいつた雪を私は味はつた。こゝにはもう道の傍に雪がなほ消えやらず積つてゐる。齒にしみて冷たい雪は私の額の汗を悉く靜めてしまつた。

漸く薄暗が支配し始め、さき程はぼんやりしてゐた山の輪廓も、今は間近にはつ

きりとその偉大な姿を見せて來た。山の肌は荒々しく、まだ葉のない木々はその枝に不思議な力を備へてゐた。

岩角をまがると強い風が私達を襲つて來た。私はこの風の中を突き進むと、その身を切るやうな冷たさが私の心を引きしめ、私は疲れを忘れて活潑に進む事ができるやうになつた。私の頬は氷のやうに冷たくなつた。私の手は麻痺してきた。山の雪がところどころに趣のある形をして残つてゐるのが見られた。

白樺の美しい林が兩側に見えてゐた。中には美しい碧い空を背景にして、やゝ赤味をおびたその芽に華やかさを保ち、その白い幹はすき透るやうに、そしてその枝振の面白さに、夕日がぱつと天つ光のやうにそそいでゐるのがあつた。私達は思はず立ちどまつてその美に打たれた。

『何といふ美しい光だらう。』

『裾模様にしたら素敵なものだね。』と友は言つた。私は三越などにかけてある華やかな衣を思ひ出した。

遂に私達は安息の地に到達した。彼方に低く夕の微光を漂はした湖水が見られた。風が強いために白い波が立つてゐたけれど、それは限りなく淋しいものであつた。異郷の湖！ 不思議な沈んだ色！ 私は瞳をこらしてその湖水の魂をうかがはうとした。何物も見えない。私の視界の範圍には全く人の影は見られなかつた。すべての緑色は失はれてゐた。黄と褐色と深く沈んだ青い湖水！ 風は強く吹いてゐた。その夜は寒い風が吹いてゐたけれど、半月は澄み切つた空に氷のやうに美しくかかつてゐた。驚くばかり大きな光を持つた星が空に瞬いてゐるのが私を驚かした。すべての物音は消え失せ、すべてに互つて神々しさが支配してゐた。

私達は岩角や木の根を踏み越えたり、小川の上に堅く氷つてゐる雪の上を渡つた

り、ぬれた砂濱をたどつたりしながら、湖畔を暫らくたどつて行つた。友はよく案内を知つてゐたので、木の茂みや林の中を抜けたりした。私達の右側には大きな五**の峰が沈黙の間に立つてゐた、時々強く冷たい風が吹き過ぎて、私達の手足の先を麻痺させた。山の姿は月の光に照されて、空には薄い尊い光がかすかに見られた。私達は粗々しい自然の中に来て、漸く落着きを見出すことができた。

私達は湖水の中の島に歩み入つた。そして朽葉や倒れた木の間を通つて島をめぐつた。湖岸の砂の上に、友はマントを着たまゝ、あふむけに横はつた。彼の姿は月の光を宿した湖水と、大きな暗い木立との間の砂濱に横はつて小さく見えた。あゝ、私達は偉大なる自然の中にはいつて来た。私はこゝに何を見、何を聞く事ができるであらう？。私は水と星とを見る。而してそのすべてを覆ふ暗の蒼く濁れる色と、口に言ふ能はざる神々しさとを見るのである。私は横はつてゐる友の傍に黙つて立

つてゐた。彼は何を考へてゐるであらう？ 彼は星を見てゐるのであらうか？ 眼をつぶつてゐるのであらうか？ 私達は遂に一言も云はなかつた。無言の間に小さい波が時々渚に寄せてゐた。

四

それは静かな午後であつた。私はもう山の生活になれてしまつた。太陽のあまねき光は心地よい冷たい空氣に暖かみを與へてゐた。友は湖水の島で本を讀んでゐるとして、キルケゴールを一冊小脇にかゝへて快活に出掛けて行つた。私は獨りで室に残つてゐた。静かに時は過ぎて行つた。夕暮の近づく頃私は湖畔をあるきながら歌つてゐた。私の聲は美しくはなかつたけれども、私の心は樂しかつた。

波打ち際には打ちあげられた鮎の死んでゐるのがあつた。私は湖水の島に歩み入

つて本を讀んでゐる筈の友を探しまはつた。島の姿は暗のなかを月の光りであるいた時とは全く違つた感じがした。それはさながらに秋の林のやうであつた。まばらな樹の枝の間からは太陽の光が照りわたつて、あかるい光が漲つてゐた。そして落葉の音は足下でかさ／＼と鳴つた。

私は波打際をあるいて行つた。せまい砂濱が低い丘につゞいてゐた小さい島ではあつたけれど、やはり島としての特質は備へてゐた。蒼い水を見つめながら歩いてゐる間に、私の頭の中には美しい空想が群つてきた。この湖水は大海とも考へる事ができる。そしてその絶海の孤島に、私が全く世から捨てられてわびしく住んでゐる。シエクスピアの脚本が思ひ出された。私の空想は限りなく廣がらうとした。私は友を探してゐる。急に友の聲が聞えた。

「こゝだよ。」

見ると樹の間から湖水の方に背を向けて、苔の生えた木の切株の上に本をのせて讀んでゐる姿が横から見えた。ソフトをかぶつた彼の姿はよい形をしてゐた。

私達はK* *の峯に登り始めた。あかるい光を持つた林の間をのぼりながら、私はどうしても今が五月であるとは思へなかつた。

「僕にはどうしても秋の終りといふやうな氣がする。」と友は云つた。

林の間を登りきると、熊笹の間のまがりくねつた道を私達は登つて行つた。やがて私達はその熊笹を通り越して、枯草のみが残つてゐる高さまで來た。見かへると湖水はもうかなり下に見えてゐた。この山の湖水が、始めてそのやゝ暗い碧色の全景を私の前に展げてきた。白樺や樅の木立も下になつた。

登るに従つて道は荒れて行つた。堅い岩に足をかけて、私は一足一足と登つて行

つた。忽ち私達の眼の下には大きな景色が展けてきた。低く限りなく起伏してゐる山脈の彼方には廣い平原があつた。躑躅の咲き亂れてゐる峯、深い溪。その遙か彼方にはやゝ柔かい調子を含んだ青空があつた。私達は高い處に來てゐる。すべてが私達の下になつてゐる。私達の右手にはJの峯が立つてゐる。私達の左には近く私達が登らうとするK**の峯の絶頂が仰がれた。偉大な山の姿。私達のうしろには淺間の山の靜かな輪郭が、ゆるやかな煙と共にながめられた。煙は時々雲になゞめに溶け流れたり、時々平和に眞直に立ち昇つてゐたりした。

K**の峯の頂には熊笹と枯れた草があつた。そして四方がすべて見晴らされた。越後の山が雪を頂いて遙か彼方に連つてゐた。

私達は大きな岩の枯草の上に坐つて、本を讀みながら落日を待つてゐた。低い山の背には小道があつた。谷間や日あたりの少ないところなどには、風に吹き集めら

れた雪があちこち見えた。山の物語り。私は友に言つた。

「火の山の淺間と、氷を頂いた白根とが相望んでゐるのは面白いね。あの二つの山が話をしないとは限らないしね。」

「ツルゲネフの散文詩にあるやうに。」と友は答へた。

私は大きな岩を背にして下の谷を見おろしてゐた。そこには白樺の林があつた。あかるく淋しい太陽の光が、軽くふるへながらその林の中に滲ぎ込んでゐた。林には清く白い雪が残つてゐた。薄赤い夕日が淡くその雪を照してゐた。私は雪の國に育つた私の少年のある春の近づいて來た頃の、淡いあまい悲しみを思ひ起さいわけにはゆかなかつた。それは何の憧憬であつたらう？ 私はこゝでかゝる心地が味はへるとは思はなかつた。その時は、ある大きな河岸の大平原の雜木林が、全くその葉をふるひ落された後に、降り積つた雪に射した夕日の光を見つめてゐたのであつ

た……私は前の谷に轉ばないやうに注意しながら友に云つた。

「やはり雪國に育つたわけ、かうして雪を見てみると不思議に色々な事が思ひ出せるものだね。」友はたゞうなづいた。

「冬のやうだと思へば秋のやうでもあるし、そのくせ春がもう眼の前に迫つてゐることも解つてゐる。」

「一種のアナクロニズムだね。それでも、もう前に一度春を経験してゐるので落着いてゐるね。何かを期待してゐるやうな苦痛などは一寸も感じないね。」と友は笑ひながら答へた。

「どうも今年は始めからやりなほしてゐるといふやうな氣がして仕方がない。」

「一體今年は僕達には餘程妙な年だよ。」

「妙といふことはないぢやない。少しも悪いところはないからね。」

と私はポケットに手を入れて歩きながら言つた。

「それはもう少しも非難すべき所はない。」

「どうしても人は、一年に一度や二度は、かうして自然の中に歸らなければ駄目だね。瓦斯や電車は、随分甚だしい害毒を人に與へる。」——沈黙が続いた。

暫くして友はまた云つた。それはヒウモアを作るための笑談であつた。

「Ohne Liebe kehrt kein Frühling wieder なんて云つても僕達には駄目だね。シルレルも大分あきれてゐるだらう。」

「一年の中に何度も春を経験するのだからねえ。」

「でも美は自由によつて得られると云つた言葉は、僕達が具體的に實例を示してゐるね。」

私はある春の始めの日、郊外に走つて行つた電車を思ひ出した。私達二人はもう

殆んど緑になつた春の郊外の景色をながめてゐた。暖かい光が車室の中をなまぬるくしてゐた。その時も私達はその言葉について話してゐた。其時はなんでも其朝大空の晴れた間を軽快に飛んだ飛行機について話してゐたのであつた。その日は郊外のある花園でヒアシンスの花を始めて見たのであつた。

薄赤い光が次第に空に輝き始めた。やがて日没になる頃であつた。四方の連山の色は複雑な變化を示して來た。その全體を薄紅の色が包んでゐる。遠い里には紫色の靄がかゝつてゐた。それが次第に遠い谷間を埋めてきた。越後の山の雪は、時に強く夕日にきらめき、また、にぶい灰色を帯びたりした。雲はみな染められた。あまりに強い光と色！「もうかうなると色々な錯覺が起つて解らなくなつてくる。」かう友はいひながら下の地をみつめてゐた。湖水の水は、暫らく夕日にきらめいてゐたのが、次第に深く暗い色になつてきた。寒い風が吹き出して、低い山々は全く太陽

の光から離れてしまつた。白根の雪が強く輝いた。雲を染めた太陽は刻々に遠い山脈に近づいた。大きな光體のまばゆさ、輝き！私はまだ芽を出さない躑躅に背をよせて、太陽に向つてゐた。やがてすべての山々から日の輝きは消え失せてしまつた。暫し雲を透した光が私達の額に接吻してゐたのが薄暗くなると、もう最後の光は私達から奪はれた。

私達は山を下つた。急な崖を走り下つて見あげるとK* *の峯は私達のすぐ前に、その偉大な姿を薄暗の中にあらはしてゐた。

友と私とは聖フランシスがラエルニアの山を下つた時の事を語り合つた。その深い感情は中々に知り難き深き意味を持つてゐた。「再び訪るを得べしとも思はざる尊き神の山」にわかれを告げた、かの聖者の心地に、私は前から感動してゐた。私は黙つて山を下つた。

私達は湖畔の道を宿の灯にあこがれながらたどつてゐた。水は小さいさゝやきを私達の耳に響かせた。美しい雲が細く對岸の山にかゝつてゐた。

「僕達がかうしてポケットに手を入れてこゝらをおいてゐるのは、銀座や日比谷を散歩してゐるのと別段な違ひはないね。」

「さうさね、これで東京に歸つて上野のステーションから銀座の方に出る。さうすると松本の前を通つて、その晩ホテルで音楽會がある事を知る。かついで來た荷物などは Cloak-room にあづけておいて、その廣間にはいつて行く。中々面白いね。」

「さうすると知つた人に逢ふ。さうとは知らないで話をしてゐる間に、ふと昨日白根の雪の輝きがよかつたとか、淺間の煙が面白かつたといふやうな事がでる。餘程面白いよ。」私達はこんな無邪氣な話に笑つてゐた。

宿の灯が近くなつて、爐で燃えてゐる火の赤黒い光も見えてきた。何の氣がかり

もない宿で、その上私達に親切にして呉れたけれど、やはりその爐邊に坐つてゐても、主人と話してゐても、輕いさすらひの悲しみはあつた。自然の中にはいつても、人のたましひは弱く打ち嘆く。私はこんなことを考へながら室にはいつた。

ランプの光は落着いた色を私の舊約全書の上になげた。暗いその色は、かゝる書を読むのには最も適當してゐた。私は一枚一枚とまくりながら、私の心が深い大きな力にひかれて、興味の中に引き入れられるのを感じた。私はモーゼについて讀んでゐた。エホバと民衆との間に立つモーゼの姿。かの聖者の姿はあまりに遙けく、あまりに茫漠とはしてゐるけれど、その尊い姿は私にある解き難き謎を與へた。モーゼは即ち神であつた。民衆が暫々モーゼに反抗を示したのは、まことは人々の心の底に深く根ざしてゐるかの不安からであつた。神を未だ全く信する能はざる多くの人々の嘆き、私はそんな事を考へた。なほ私はこの書が一の民族史としても、なか

なかに及びがたき精確さと技巧とを有してゐるのに驚いた。民族の動搖をかくまで正しく内的にも外的にも描き出したものは恐らく他にないであらう。

友はキルケゴールドの“Entweder Oder”を讀んでゐた。この程彼はこの哲學者やストリンドベルヒなどについて多く語つた。外にはやゝ風が出てゐるやうであつた。

五

私達は外光に浴せぬために、私達の心を貧しくする事はできなかつた。その外にその日は多分畫家のJと、歴史を研究してゐるSとが、私達のあとからこゝに來るだらうと思つたので、途中まで出むかへて、何かの楽しさを感じやよと思つて外に出た。

私と私の友のMとは二三日一緒に生活してゐた。彼のやゝ暗い鋭い性格は屢私の心を重くした。それは勿論すべてに於て彼は *refine* されてはゐたけれど、彼の時としてあまりに冷たい理性と、するどい感情と、彼の強い意志とはあまりに近く接してゐる時は、私のやうなすべてに弱い性格には、多少の苦痛を持ち來すのはありがちな事であつた。然しながら、それはすべて善に向ふ道を歩むものであるため、私はそれをさげようとは思はなかつた。

彼の鋭い性格からの作用は、あるひは私に多少の苦痛をもたらすと共に、私の顔を暗くしたかも知れなかつた。そして私達二人の間には、何か一つの小さい不調和が見られた。それは然し單に私の心の小さい影であつて、やがて消え去るべきものであるかも知れなかつた。彼も山に來た初のやうな快活さを忽ち失つて、殊に近くゐるせゐか、彼の顔に時として起る陰鬱な調子は、また私の心をも曇らせた。彼は

始終何かを考へてゐるらしかつた。どのやうな思想が彼のうちに動いてゐるかは、容易に捕捉し難かつたけれど、そこに陰鬱な調子は除き難くあらはれてゐた。その日の午後になつては、天氣もやゝ曇つて、湖水も灰色ににぶい光となつた。

私の心には寂しさがその芽をきざし始めた。山の宿は二三日後の祭禮のためになりにぎやかになり、下の室では田舎人が澤山集つて酒を汲み交しながら、聞くに堪へないやうな端唄や浪花節などをうなるため、騒擾に堪へ難い程であつたけれどこの寂しさは除き難く次第に強い調子となつて私を襲つて來た。

私達は湖水に沿うて白樺の林を通り抜けて丘に登つた。そこからはこの山を訪ねて來る旅人を悉く見得るやうになつてゐた。やゝ曇つた大空で、光はにぶかつた。枯草の黄ばんだ色の間に、黒い道が岩の間を曠野の道のやうにまがりくねつて里の方に消えてゐた。友はこの原が秋には非常に美しい所で、紫色の花が一面に咲くと

話した。

丘の枯草は漸やく雪から自由にされたばかりであつた。その中に赤と紫との花瓣を持つた猩々袴が咲いてゐた。その花はその美しさの外に、花などはなかく〜に見出す事はできぬであらうと思つてゐた私達の心を限りなく楽しませた。

高い丘の草に寝て私は聖フランシスの傳記を読み始めた、中に含まれてゐる物語は、おほむね私には親しいものではあつたが、中に一種の純潔さと力とを持つてゐるために、私の心を限りなく引きつけた。

私と友とは話す事が次第に内的に深くなるに従つて、聲の調子を落して話した。そのため他から見たら退屈のやうに見えたかも知れないけれど、そのやうな時はお互の心はかへつて苦しいのであつた。

私達の歩いてゐる左側には暖かさうな谷があつた。その谷には白樺があり、其他

の灌木も茂つてゐた。その白樺の美しさはまた私達の心を誘つた。

「森の中をあるいて見ようか。」

「それも面白いだらう、荒れてはゐるけれどもね。」

「奥の方はなかく整頓してゐるのですよ。」

私は白樺の幹にもたれて太陽の沈んでゆく光に向つてゐた。友は彼方の木によつてゐた。こゝからは湖水の方に行く旅人の通る岨道が見られた。そこを私達の後に來る仲間が通つたら、彼等の知つてゐる Linden Baum を歌つて、彼等を驚かさうといふやうなことを私達は話し合つてゐた。

丘の上では雲雀が高く鳴いて飛ぶのが、私のたましひを遠く高く運んだ。この谷では、私達は何鳥とも知れぬながらに美しい鳴聲を持つた鳥の歌に酔はされた。それは親鳥が雛鳥に教へてゐるのかも知れないと思はれた。親鳥が高いソプラノで四

聲か五聲鳴くとや、離れた所でひなが二聲か三聲ないた。

「あ、小鳥が二部合唱をやつてゐる。」と私の友は云つた。私達はその歌に聞きほれてゐた。その中に夕日は沈んで谷の中は薄暗となつた。私達はまたあるき出してゐるけはしい坂の上の廣野で新しく來る友を待つてゐた。この廣野にはまだ日は沈んではゐなかつた。黄色い光は野のすべてを覆ひ、左側の深い谷には溪流が小さい音を立て、ゐた。何か遠く響くやうな音がすると思つて見渡すと、それは谷の彼方の斷崖を轉がり落ちる石の音であつた。私はフランスの傳説を讀みながら廣い野原の上をあるいてゐた。私達の新しい友はまだ來ないのではないかと思はれた。私達はこゝにかうして新しく人の來るのを待つてゐる。矢張り私の心は淋しさを感じてゐるに違ひない。無人島に流された人が人の顔を神のやうに懐しく思ふ心とまで誇張することもこの場合面白いことであつた。私と友とはいつの間にか遠くはなれて

みた。この廣い野の間には人はまことに小さいものとなつて見えた。友の姿は遠く小さく見えた。それはまはりの對稱があまりに大きいからのことであつた。彼方の原には六七人の山の男女がまるく輪を造つて博奕を打つてゐた。

私は彼方の山脈にやがて沈まんとする太陽に眞正面に向つて眼を閉ぢて野の幻を追つてゐた。この時突然に繪具箱を肩にかけて、小脇には大きな水張板をかゝへたJの姿が坂の下からあらはれた。彼は夏服を着て細いづぼんをはいて、麥藁の夏帽をかぶつてゐた。彼の細い姿を見ると、私は駆け寄つて歡喜の歌を歌つた。

「Sは？」と私は尋ねた。やがて彼の姿が見えた。彼の姿はアスハルトの上をあるくのと別段に違つてはゐなかつた。彼は足駄をはいてゐた。彼はうまさうに雪を嚙りながら近づいて來た。彼は微笑んでゐた。

私は四人になつて宿の方にあるき出した。Jは快活に話した。Sは沈黙してゐ

たけれど楽しさうに見えた。私はせかれてゐた水がほとばしり流れるやうに、二三日前からの山の私達の生活を彼等に話した。興味ある多くの事が此時のために著へられてあるかのやうであつた。

宿の室は急ににぎはつた。私は都から持つて來た紅茶を沸して打ちくつろいだ。やがて私達四人は船を湖水に浮べた。月は雲間からあらはれたりかくれたりした。そして白い雲は夢のやうに浮んでゐた。山の姿も薄い霧に包まれておぼろであつた。水も春らしくなめらかなつて舟の舷を流れた。

Jはその歌で著しく快活さをこの群に添へた。彼は昨日までの都の生活について弱く話した。然しそれはこの靜かな清い自然の間ではやゝ不調和に感ぜられ、Mはやゝ憂鬱な顔をして黙つてオールを握つてゐた。

私達は島に上陸してその岸をめぐるた。その島は美しい島であつた。新しい二人とも少なからずその島を愛するやうになつた。私達は木の間の暗の中で一度に一本のマッチで首を寄せて四本の巻煙草に火をつけた。マッチの光はしばし島の暗を照した。

「あそこにある白いものは岩かしら？」とSが尋ねた。

「なに雪だよ」と私達は聲を揃へて答へた。

私達はまた道の真中程のところ、月の光に照されて白く輝くものを見た。

「雪でせうね。」と云ひながら私はそこに近づいて行つた。それは然し白樺の皮のはげ落ちたのに、月が木の枝の間から漏れて、そゝいでゐたものであつた。

「雪ぢやない、白樺の皮ですよ。」私はそれをJに示して私のポケットに入れた。その間Mは始終先に立つてゐるいてゐた。彼は大抵沈黙してゐた。

六

あかるい午後の日の光の中を、私達は晝を描きに行くJを彼方の岸まで送つてゆくために舟にのつた。Sが櫓を押して舟は早く進んだ。空はやゝ柔らかい不透明な色になつた。それがいよゝ春の近づく事を思はせ、波も柔らかく小さい波の陰には、云ふにも云はれぬ程美しい琥珀色のかげができた。

Jは白樺や榛の木立の中に晝架を据ゑた。私達は少しまた奥にはいつて、そこに面白いかたちをした谷を見出して、その斜面に臥して本を讀み始めた。Sはあちこちあるさまはつてゐた。

白樺の林にはあかるい光が漲つてゐた。私達は常に白樺を愛した。この木はさながらに生きた女のやうな柔らかかな肌と線とを持つてゐた。ある若木は十四ぐらゐな

處女を思はせ、年經た堅い木さへもなほ老年の女を思はせた。白樺の木はどうしても氣高い女性を聯想させるやうな姿をしてゐた。

突然に本を読んでゐたMは顔をあげて私の方を見た。その眼は充血してゐた。そのやうな時は私は何か彼の心に惱えがあるのではないかと思つてゐた。

「僕は二三日したらずつと山を越えて日光の方に行かうかしら。」

「獨りで？」

「え、僕はどうも、もつと激しい *Bewegung* を味つてみたくなつた。」

私は彼の心地の幾分かは解るやうに思はれた。それで言つた。

「君はこの一二日は、山に來た頃などよりは餘程憂鬱になつたね。 *Bewegung* と云つても、たいそれだけでなく、別に動機があるんぢやない？」

「え、それはね、もう *Notwendigkeit* になつてゐるのだから。」と彼は答へた。

太陽の光は暖かく、小さい羽蟲が飛んでゐた。Sは谷におりて雜木林の間にはいつて行つた。やがて彼は彼方の丘の上の岩にのぼつてそこから私達を呼んだ。彼の姿は小さく黒く見えた。私達は帽子を振つた。彼も帽をあげた。彼は丘の上の木に登つたり、丘の枯草の上をぶら／＼とあるいてゐたりした。彼は何を考へてゐるのだらう？ 彼は満足してゐるに違ひない。

「今日ね、Jと島に行つた時、JはSが一番つまらなさうに見えるよと云つたけれど僕はさうではないだらうと云つたんだよ。Sが一番幸福らしく見える。」とMは言つた。

「Sはね、今朝K**の峯に登つたとき、君がすばやいのに感心してゐたよ。けれどおれのやうなものは、着實にやつてゆけばよいんだな。やはり遅くても山には登れるしなどと云つてゐたよ。」

「さうだらう、人は色々なものを持つて生れて来るのだからね。」

暫らく静になつた。然し私は本を讀む氣にはならなかつた。私は上着をぬいで、シャツ一枚になつた。丁度よい暖かさが肌をあたゝめた。

「僕はね此頃自分の *Steigerung* があまり激しいので驚いてゐるよ。それがね、何か自分の範圍を越えるものゝやうでね。」とMは云つた。

「範圍を越えるといふことはないだらう。その中に範圍は廣がつて行く筈ぢやないか。」

「それはさうだね、何か僕を非常な強い力で試みるものはないかな。僕は自分の存在といふものゝ強い確實さを見つけたいね。それがともすれば惨いものだといふことが一寸した機會からも解るものだから。」と彼は云つた。

「君などは僕から見ると幸福な位置にあるよ。」

「それは僕のやうな性格の棲家としてだらう。それはあるひはさうだらうね。例へば目的といふやうなものをきめるにしても、僕は随分選擇の餘地があつたんだからね。だけど性格の根本に何か缺けてゐる事があつては駄目だ。」

「Jはもう大分描いたかしら。」と私は尋ねた。

「Jはあゝして繪と歌とで満足してゐられるのかな。」

「實際Jはまだ若々しいところがあるね。」

暫らくたつてからMはまた云つた。それはやはり性格といふやうな問題についてであつた。

「僕は例へば變愛といふやうな事についても、そのエロテイシユな方面は不思議な程缺けてゐるよ。」

「けれどエロテイシユな方面などは……」

「いや、エロシイシユな方面も價值はないとは云へないよ。それは戀愛の外面にあらはれる形式から云つても解る事だしね。」

「それはさうだらう。然し僕などは必ずエロテイシユな方面をも兼ね備へなければならぬとは考へないよ。」

「それはもとよりさうだとも。すべて物に二つの屬性アトリブツトがある時、必ず兩方面を備へなければならぬといふ事はない。色でも何の調和をも持たない一つの色でも存在の價值はあるからね。それは兩方を持つのはより完全だらうけれど——戀愛なども非常な幸福グリュックのために、この兩方面が完全に調和することがないとは云へない。」

私達はかうして話し續けてゐた。繪畫、音樂、哲學。太陽はいつ沈むとも見えなかつた。そして空氣はやはり暖かく、空の色は美しかつた。私達はこの二三日の間に著しく春が蘇つて來る自然に驚き、あるひは都の友達の噂などをし、あるひは聖

フランシスについて話したりした。な、めな夕日が射す頃になつて、Jも繪をしまつて歸ることにした。その繪は色の調子がきはだつて、この野の荒れた光はあらはれてゐなかつた。Mは恰も教師のやうにその繪を批評した。彼はその缺點などをも指摘した。然し彼はもと繪を描いてゐたので、その批評は大抵當つてゐた。Jは黙つてそれを聞いてゐた。

Mはもう繪を描かないと云つてゐた。それは彼の頭が次第に哲學的に深く沈みゆき、そのために繪を描くといふとは、自然を最も不親切に見る方法だと思ふやうになつたためであつた。彼は繪を描く事は自然に對する思索をさまたげると思つてゐた。

七

今日もJは水檜の林を描いてゐた。彼は畫架を据ゑて見わたすと、葉のない水檜

の幹と枝とは、複雑な線を示してゐた。空は澄明な暖かみを持つて美しい色をしてゐた。そして山の姿が水の面にあらはれてゐた。木の枝に名の解らぬ黄と赤と紫とを羽に染めた美しい鳥が軽く飛んで来て美しい聲で鳴いた。

湖沿の道は暖かつた。一日／＼と春が近づくのが眼に見えるやうであつた。あつても草が大きな芽を出してゐたり、櫻草が愛らしい芽を出してゐたりした。處々平らなところに牧草がやゝ青味を帯び始めた。白い軽い雲が山の肩にかゝつてゐたり空に浮んだりした。荒れた色の間にも、もう春のほのめきはうかゞはれた。

私達は白樺の若木の立つてゐる、あかるい林を抜けて、猫々袴や牛の毛草の咲いてゐる丘にのぼつた。丘をのぼりながら見渡してゐると、空が少しづつ變つて行つた。彼方に怖しく暗い濃い鼠色の雲があらはれたと思ふと、K* *の峯に軽く霧がまつはり始めた。

「夕方頃になつたら雨が降るかも知れないね。」

「大抵大丈夫だらう。」

私達はこんな事を言ひながら丘の上で暫らく休んでゐた。静けさと平和。そして明るい氣分。谷を距てた彼方には、一帯に低い丘陵が連なつて、その中腹を帯のやうにS* *の峯の方への道が続いてゐた。私達はその峯に登るために近道を通つた。

私達は急な崖を谷に下つた。雑木につかまりながら急な坂をすべるやうにおりて行つた。下の谷間には清い水が軽いさゝやきと共に流れてゐた。

「あれ、あんなに綺麗な花が！」とMは急に振り返つて私達に指し示した。そこには美しい紫色の花が一面に咲き亂れてゐた。意外にもかゝる美しい不思議なところを見出したよるこびに、私達は崖を駆け下つて、その花の咲き亂れた前に暫らくぼん

やりと突立つてゐた。それはかたくりの花であつた、見あげると私達の下つた崖の雑木をすかして美しい空がなめられた。そして白い雲がその間に浮んでゐる。さながら夢のやうな心地になつて、私達はその花をのみ見つめてゐた。

「みんな花びらは下をむいてゐる、謙遜な花だ。」とMは云つた。

「ニムフでもでて來さうな處だね。」とSは微笑みながら云つた。

私達はこの山に來る途中で見た、あの黄色なきむぼうげの咲き亂れた谷間を思ひ出した。あそこにも小川が流れてゐた。黄と紫、私はそれが不思議な對照をなして、何かを暗示するやうな氣がした。紫と黄。私はこの二色を頭の中にならべてみた。

黄は春の花、紫は秋の色。それが何の故ともつかず私はさう考へてみた。私はまた黄色は今の山の色。まだ緑にならぬ前。春のやうやくほのめく頃のこの山の色。紫は都の色、戀の色。さうして私はかう考へて何か不思議な感じがした。私はやがて

都に歸る。私の都の生活はどういふやうに展けるであらう？ あの塵の都。あそこにはたゞすべての物の乾燥があるばかりではあるまいか。私は怖れと望みとを持つた。

私達は谷を渡つて彼方の丘にのぼり、その中腹を傳つて次第にS * *の峰に近づいた。熊笹のみが山を覆つて、ともすれば迂りがちな危い道を傳はつた。湖がながめられる。やゝ曇つた空のために、水は暗い色で、たゞ一所のみが、風のために波立つてゐるのが白くきらめいてゐた。

「あんなところは繪をかくと苦しいね。」

「天氣が變つて來たのでJは困つてゐるだらう。」

湖水から流れ出る水はけはしい不思議な峡谷を傳はつて、私達の前の深い谷に流れ出でゝゐた。近寄り難い斷崖には、一面に薄紅い躑躅の花が咲き亂れてゐた。深

い谷の底には水がほとばしり、谷の斜面には層をなして種類の遠つた植物が生えてゐたので、濃淡の調子が面白い姿をしてゐた。低く彼方には木蓮のやうな白い花が見え、また山櫻のやうな花も見えた。

遂に私達は丘の頂に達した。そこからまた急な坂を下つてS**の峯に橋のやうに續いてゐる丘の背を傳はつた。右には谷、左にも谷。左の谷は深く長く奥にのびてゐた。そしてそこは牧場になつてゐて、この丘の背には牧場の柵があつた。彼方に小さく群れ遊ぶ牛の美しい姿が見えた。その真中には牧舎が私達をロオマンチックな力で誘惑してゐた。

S**の峯は五葉の松の美しい姿や、あらゆるぎの強い姿などで飾られてゐた。近く寄つてみると山は悉く岩からのみ成つてゐた。灰色の強い色をした岩には地衣がついてゐた。私達は軽い心で岩に手をかけて登つて行つた。多くその岩は平らな板

のやうな形であつた。

遂に私達はS**の峰の頂上の大きな岩に腰かけた。下には複雑な面白味をもつた谷を見おろしてゐた。その溪谷はやゝ廣い餘裕を持つてゐた。そしてそれがまた左の方からの谷と、彼方の低いところで相逢つてゐた。ある低い丘の斜面には落葉松がそのやはらかい、純粹な緑青のやうな色をばつと私達の眼に映した。

私は持つて來た聖書を開いた。Sが言つた。

『山上の説教といふのがあつたね。』

『それを讀まう。』Mはかう云ひながら、その頁をあけて讀み出した。私達は靜かに彼の聲を聞いてゐた。その句は多く私に親しいものではあつたけれど、このやゝ暗い色をした空の下で、山の上高く、かゝる言葉を聞くのは、私には強い感動を與へた。「心の貧しきものは幸なり。天國は即ちその人のものなればなり。」「心の清きも

のは幸なり。その人は神を見るを得なければなり。」といふやうに彼の言葉は進んで行つた。私達は恰もクリスト教徒の如く敬虔な態度でそれを聞いてゐた。彼は第五章を読み終つてそれをSに渡した。

『順々に讀まう。』彼は言つた。曇つた空ではあつたけれど、夕暮の薄赤さがほのかにあたりに漂つてゐた。

『つゞけて讀むのかい?』とSはためらひながら聞いた。やがて彼は次の章を讀み終つた。「なんぢ祈るときはひそかなる室にいり戸を閉ぢかくれたるにゐますなんぢの父に祈れ。」「天にましますわれらの父よ、願くはみ名をあがめさせ給へ。み國を來らせたまへ……」やがて私はその次の章を讀んだ。「偽善者よ先づおのれの目より梁木をとれ……」といふやうな句もあつた。私は感動して來た。遂に救世主は山を下つた。「人々その教を駭きあへり。そは學者の如くならず權威をもてる者の如く教

へたまへばなり。」

振り返つてみると、山人が頂上で夕日に禮拜をしてゐた。私は私達がかうして恰もクリスチャンのやうに聖書を讀んだり、聖フランシスについて考へたり、「Imitation of Christ」について暫々話すのが不思議に思はれた。然しながら、かゝる書は、静かな淡い色の間に、さめ難き力と興味と感動とをもたらした。私達は宿にゐるときも、山道のあるくときも、また夜、湖水に舟を浮べるときも、如何に暫々持つてきた讚美歌集を開いて歌つたことであらう。それが如何に静かな、ある種の尊き氣分をもたらしたかは、自分ながら驚かれるばかりであつた。然しながら一度亂れた私の心にまた神が歸つて來るまでには、如何ほどの清さと單純さとを必要とするであらうか。私の努力は如何に激しくなければならぬであらうか。It is no small matter to gain the kingdom of God. 私は静かな氣分になつて谷の景色を見おろしてゐた。

紫色の煙がゆるやかに立ち昇つてゐるので、人家が彼方の谷間にある事が解つた。
 『この邊にゐる人は知つてゐる人なども少ないだらうね。さうかと思ふと僕達のやうに都會の真中にゐて、どうしてもさういふ生活でなければならぬやうに考へて、苦しんでゐるものもあるんだね。そしてたまに來てかうして色々な事を考へてゐる。こゝに一生何も知らずに死んでゆく人の事を考へると妙な氣がするね。』
 『さうねえ、知つてゐる人などはほんとに少いものでせうね。』 Mは答へた。
 やがて夕闇が近づいて來たので私達は山を下り始めた。熊笹の岨道を傳はつて來る頃軽い雨が降り出した。私は聖書を上衣の下に入れて道を急いだ。

八

私達は規則正しい習慣に従つて朝の紅茶をすました後に、美しい日の光の中で暫

らく軽い雑談をしてゐた。私はやがてこの山を去る時の事を考へた。また同じ道を引つ返して都に歸るのは、何となくあまりその單調に堪へ難く思はれて、私は不満足であつた。

『また前の道があるくのは面白くないね。』と私は云つた。

『ちや雪の峰を越えて日光の方に出よう！』とMは強い調子で云つた。私達はそれで満足した。なほ山深く進み入るといふこと、旅の終りを長くするにはこれよりよい事はなかつた。私達は新たに旅に出る時のやうにそはくしてゐた。このやうに私達のきまぐれが急にすべてを變へ、また忽ち決定されるのは驚くべき事であつた。然しながら私達のきまぐれはまことはきまぐれではなくその動機は奥深い心の底から出るものであつた。

『こゝに來る前の日のやうに氣が浮き立つて興奮してゐるね。』とMは云つた。

私達の心は更にさまよひのために躍つてゐた。Mは少年の頃その地方を旅したことがあつたので、皆にその深い谷の印象などを話した。

私達は旅の用意をした。深い山と雪の中にはいるので、荷になるものはそれごとくに宿におきざりにした。私達の心は更に躍つてゐた。

静かな宵となつた。私達の心は期待のために楽しんでゐた。暫らく外に出てゐたMは室にはいりながら云つた。

『月を見て來たまへ。不思議な赤い色をしてゐるから、サロメのバックに丁度いゝやうな月だよ。』

私は屋根にのぼつてうしろの山にかゝつてゐる不思議な赤い光のぶい月をながめやつた。月の赤い重い光のために山と野と湖と林とのすべてには神祕的な暗い色が流れてゐた。すべては動かなかつた。

私は暫らくその月の不思議な色にたましひのありかを忘れたやうに茫然となつてゐた。

山の人々はやはり爐邊からこの月を見てゐた。

『お月様が赤いから、きつと明日からは日でもしらねえぞ』と彼等は噂してゐた。

次の朝は紫色の霧が湖水の面を流れた美しい朝であつた。この朝K**の峯の絶頂にのぼつてゐた山人は一週間ばかりこの山に滞在した四人の青年が軽い足どりでG**峠を越えて深く谷の中にはいつて行くのを見た。山人は彼等が遙か彼方の谷間で一面に燃え廣がつてゐる野火の中に勇ましく進み入るのを見た。彼等の姿は煙の中に見えなくなつてしまつた。——一九二四、五、二三、——

大正十三年六月廿八日印
大正十三年七月一日發行
刷行



藝樂道場叢書 第六編

「朝」

定價金貳圓

著者 久保謙

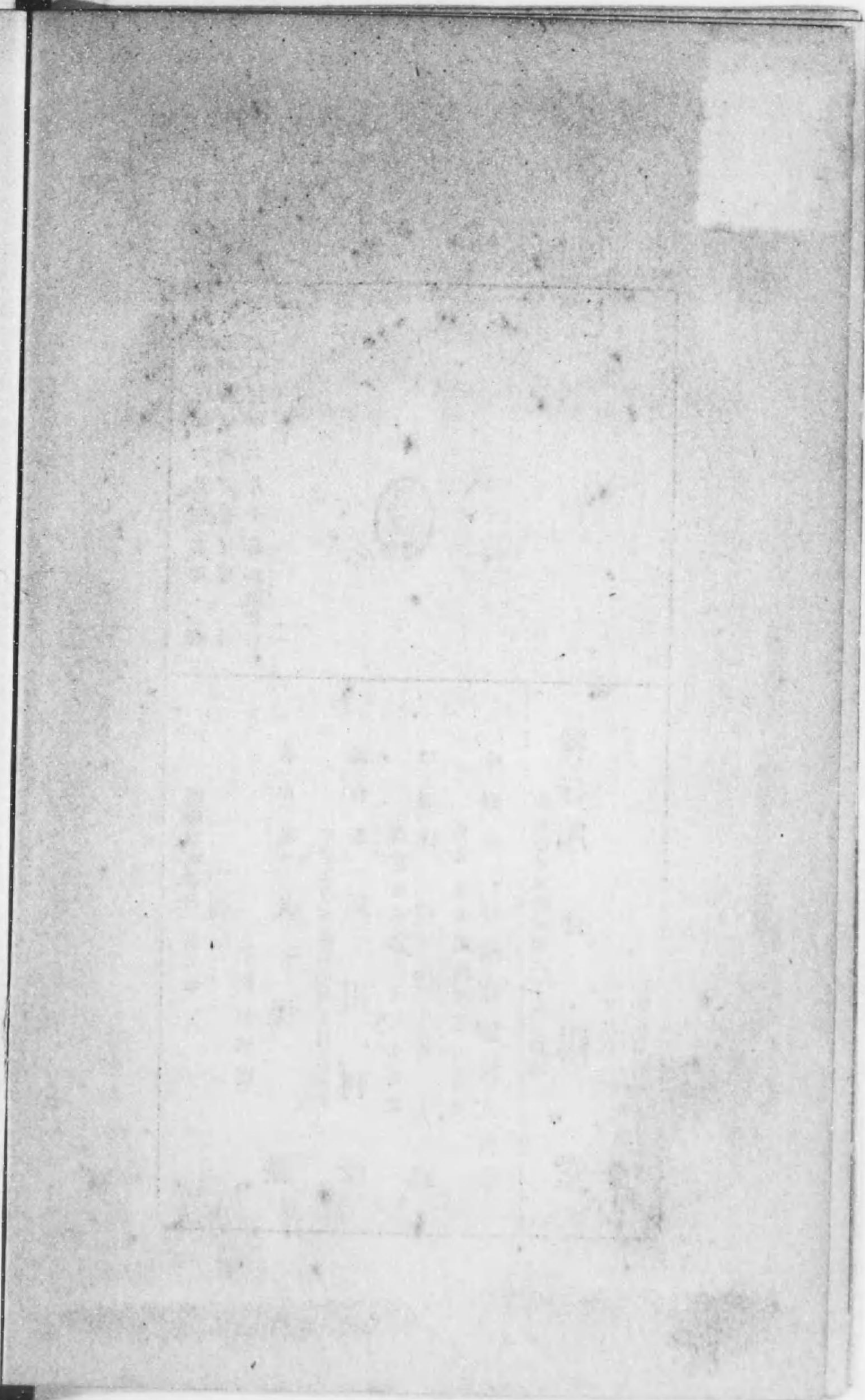
發行者 和利彦
東京市日本橋區通四丁目五番地

印刷者 竹內喜太郎
東京市牛込區櫻町七番地

印刷所 日清印刷株式會社
東京市牛込區櫻町七番地

發行所 春陽堂
東京市日本橋區通四丁目五番地

電話大手 一四二一
振替東京 六一七〇



終

